もう一つの2007年問題――夫婦改革のチャンス

渡辺　美恵

団塊世代が定年を迎える2007年を前に，NPOや自治体を中心に，「お帰りなさいお父さん」などと銘打つイベントをみるたびに心地悪さを感じていた。それは，こうした企画のすべてが男性の生き方指南に偏向していることである。地域社会には定年を迎えた女性も，地域活動やボランティアに関わりたい女性もいっぱいいるはずなのに，目にする情報は男性主体のものばかり。そこには「女性」「妻・お母さん」の姿はない。これはおかしい！

1947～49年生まれの団塊世代を含めた周辺人口は総勢1,000万人ともいわれている。なかでも働きバチや企業戦士と揶揄され仕事一筋に邁進してきた男性たちのこれからは手本のない未知の老後でもある。私の心配は，地域に帰った元気な60代の今後である。知恵とエネルギーを自負する彼らを，企業戦士からボランティア戦士に変えるだけでは男女平等参画社会は進まないどころか，妻（女性）は飯炊きのままである。これではいけない。

私が行った調査（「女性の病と家族の構造」）では，「専業主婦は給料なし，休暇なし，定年なしの三無主義です，老後もこのままなら離婚も考えたい」と記されていた。これに限らず，「無口・無理解・無反応の夫たち」との問題解決に定年は絶好のチャンス，夫婦改革の好機ととらえ，NPO法人生活企画ジェフリーは，連続4回講座「中高年の新たなスタート応援塾―夫婦で変わろう第二の人生」を実施する（11月18日～12月9日）。

この事業は，西東京市NPO企画提案事業で採用，実施されるもので，行政との協働事業である。市民・生活者の問題にきめ細かく対応し，解決への手立てを考えていこうと，市民活動実践者とジェンダー研究者の双方から，生活場面と社会的見地のバランスを考え企画した。加えて男女平等や人権等の言葉を使わずとも，定年後の家庭・地域生活に欠かせないのは何かを汲み取ってもらえるような仕掛け（ノート「夫婦の覚え書」）もした。

地域社会にあっては，今日の，今の問題をともに考え，寄り添う姿勢なしに人びとの共感は得られない。また，生身の自己（私）をさらけ出さねばならない難しさもあるが，確実な手ごたえも感じることができ，ささやかな活動も悪くないと思うこの頃である。

（わたなべ みえ・会員）